

寺社参詣における書物の機能

——鎌倉参詣と『新編鎌倉志』——

はじめに

中世宗教とは違う近世宗教史の大きな特徴を挙げるならば、幕藩権力による檀家制度も含めた宗教統制、宗教者組織編成、そして寺社参詣の発達・民衆化である。前者については竹田聰洲¹、大桑斉²、朴澤直秀³の各氏により民衆、地域の自立性の上に幕藩権力が制度化したものとの見解が提示されている。また近年では高埜利彦氏⁴らの身分論的宗教史も活況を呈している。一方で、後者については、新城常三氏の大著『社寺参詣の社会経済史的研究』⁵が上梓されて以降、総合的な試みは少ないものの、名所論・地誌論・道中日記研究など新たな展開を次々と生んでいる。さて、先述の新城氏は、著書のなかで近世に社寺参詣が発達した要因と

して次のようなものを挙げていた。「民衆の上昇」「交通環境の好転」「参詣の遊樂化」「乞食参詣の横行」「御師・宿坊の発達」「講の発展」「封建的規制」の七点である。これらを俯瞰すると、現在研究が進んでいるものとそうでないものがある。これはすなわち宗教史、寺社参詣史単独で解決できるものとそうでないものとの差とも言えよう。新城氏の指摘された要因のほかに、現今の研究状況を鑑みると絶対を外すことのできないのが「情報文化の発達」である。すなわち名所記・名所案内記類、旅を題材とした滑稽本、絵図などの盛業である。そしてこれも寺社参詣史のみでは解決できないものでもある。

寺社参詣史に関連する情報文化という点でいえば、以下の二通りの研究方法が確立されている。

原 淳一郎

①名所案内記・名所図会の成立背景、作者の詳細の解明、ならびに類型化をするもの。古くは国文学の範疇であったが、最近では地理学、歴史学（地誌史、由緒論）的立場からも盛んに行われている。

②名所案内記・名所図会の記事、項目、対象範囲、絵などから民衆思想、社会構造を読み取ろうとするもの。具体的には、都市景観構造、都市名所形成、名所観などを考察するものである。

だが寺社参詣史の発達の要因を見極めようとする場合、本当に問われなければならないのは、いったいこうした出版物がどの程度の人の目に触れ、そして本当に参詣を誘発するものとなり得たのか否か、ではないだろうか。一般的にこうした出版物が「読むもの」から「使うもの」へと変化したとされる。そして例えば『膝栗毛』が爆発的にヒットし参詣を誘発したと安易に書かれることが多い。だが、本当にこれを実証した人がいるだろうか。とは言え、それでは雲をつかむごとき話である。それ故本稿では、とりあえず一つの場、一つの書物、一つの地誌を事例として、その検証を行っていきたい。本文中では、情報文化が参詣を誘発するものであったか否かという点も考察するが、書物が名所空間構造、名所形成に与える影響はいかなるものかという点も含めて、寺社

参詣における書物の機能を全般的に考察していかうと考えている。

それでも、近年では【作成】↓【受容】（読者）↓【参詣行動】、【作成】↓【受容】（地域、地元）↓【地域構造】といった諸点を一体化して把握することを目標とする研究も若干ながら見受けられる。また寺社参詣史とは特別関係ないが、近世の著名な地誌『利根川図志』が創られた背景、およびその販売層を詳細に明らかにした川名登氏の研究も、書物の流通史という観点において大いに参考になるものである。またここ数年急速に質量共に向上している（知）の形成論の動向にも目を配らなくてはならないだろう。

ところで、本稿で考察対象とするのは近世の鎌倉である。鎌倉は、中世前期の政治的中心都市からいったん寂れ、近世初頭には一農村の様相を呈したというのが『鎌倉市史』などにおける一般の見解である。その後は再び脚光を浴び、近代以降は海水浴場、リゾート地、文化都市、古都などと多様な側面を持ち合わせた都市である。この一般の見解に従うならば、近世鎌倉史は観光都市として新たに再発見され、再生していく時期にあたる。また十九世紀の毛利家、島津家の藩祖廟整備にみられるように、武家の聖地として認識されていた側面もある。さらには地域からの情報発信も盛んであった。すなわち鎌倉絵図・鎌倉名所記といった出版物が、在地出版から発信されていた。このように鎌倉は、いくつもの層の名所認識が存在した可能性がある興味深い素材なのであ

る。

一、道中日記・紀行文の分析

1 参詣の二形態

考察を進めていく前に、道中日記・紀行文の類から、当該地の参詣行動について確認しておくこととしたい。これらの史料を分析すると、おおよそ二形態の参詣行動が浮かび上がる。それが① 周回・三所巡り型「金沢・鎌倉・江ノ島」と② 簡略型である。① 周回・三所巡り型は、鎌倉内に二・三日滞在し、江ノ島ならびに金沢（六浦）とあわせて三箇所を必ずまわるというものである。おおよそ鶴岡八幡宮門前の雪の下に宿泊し、東西南北を隈無く見聞して歩く者が多かった。これに対して、②の簡略型は半日から一日の滞在中で、通過するようなイメージのものである。

① 周回・三所巡り型について、とりわけ特徴的な点についてより詳細に指摘してみよう。この行動形態を見せる人々は、主に江戸の住人である。また史料は紀行文といえるものが多い。彼らはその主たる目的こそ多種多様である。だが、いずれも鎌倉に滞在する風を見せ、その間、実に数多くの名所をまわっている。分析対象とした二二点の紀行文でいえば、実に二四二名所を訪問している。② 簡略型（二四点）がわずか三五名所であるのとは対照的

である。また代表的な名所案内記である『東海道名所図会』に紹介されるのが一二名所であるから、こうした案内記類に示された名所空間をはるかに凌駕するかのごとく数多の名所を開拓していたということが分かる。ただし例えば『新編鎌倉志』（四四三名所掲載）のように、名所を悉く網羅することを意図している地誌類にはさすがに及んでいない。

また江ノ島・鎌倉・金沢と、三所巡りをするのが彼らの特徴であるが、このうち金沢へ赴く行動がこの特徴を決定づけている。何故なら、② 簡略型の人々も江ノ島・鎌倉の二箇所はたいい訪れるが、金沢に行くケースはごく僅かであるからである。すなわち、金沢は、江戸在住の知識人層によって専ら名所化した土地であると云える。このことは、『新編鎌倉志』の凡例にある「金澤者武州六浦莊、而非相州鎌倉郡（中略）地理相接景勝秀美、閒人墨客過鎌倉、以遊金澤為壯觀」¹⁰との言葉からも分かる。

② 簡略型に類型される史料は、東北地方住人の手による道中日記が主である¹¹。彼らは、鎌倉を通過するかのようには、東海道戸塚宿から南下し、山ノ内から雪の下、長谷を経て江ノ島へ抜けるケースが多かった。訪問地も、円覚寺・建長寺（山之内）、鶴岡八幡宮（雪の下）、大仏・長谷寺・御霊社（長谷）のおおよそ六カ所に特定される傾向があった（図1参照）。

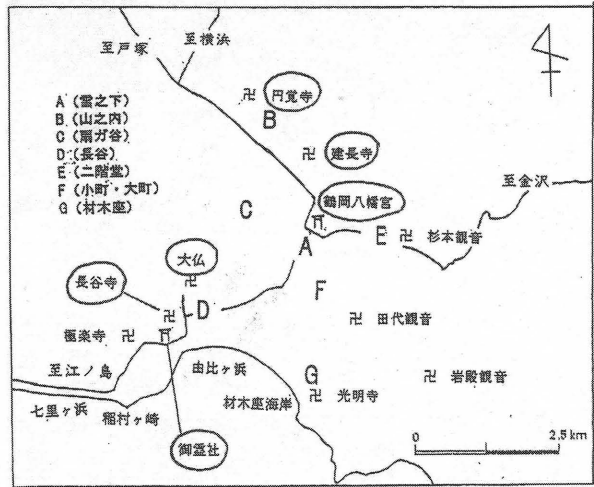


図1 鎌倉・江ノ島

2 歴史的知識の基盤―記憶の再構成

このような違いをもたらす要因は様々あろう。だが、あくまでも文献史学の立場から、史料上で明らかにしうるところから考察しておきたい。とりわけ、①周回・三所巡り型の行動を示す江戸の知識人層が、いかに名所案内記にも載らないような名所を発掘したのか、という点を問いたい。そこで、次に江戸在住者の知識の基盤への考察を行う。

表1は、代表的名所案内記である『東海道名所図会』の鎌倉部

分、鎌倉の代表的地誌『新編鎌倉志』、そして①周回・三所巡り型の行動をする参詣者の紀行文、それぞれに引用されている文献の統計をとったものである。とくに、徳川光圀の命で彰考館により編纂された『新編鎌倉志』は、百十九冊もの引用文献の一覧を添えている。孫引きをせず、できるだけ原典にあたり、考証するという行為は考証学の立場を明確に打ち出したものと言える。

さて、表1の三つのケースを見ると、あえて指摘するまでもなく、『吾妻鏡』『太平記』『元亨釈書』といった史料の引用が群を抜いている。これらの書物が、流布本・通俗書・講談・講釈・芸能など、どのような手段で受容されたかは別として、いかに中世前期の基本的文献として重宝されていたか、ということを示すものである。前期水戸学派のみならず、紀行文の作者達全体に、こうした中世前期の国史を再構成化する営みが看取されることは、やはり歴史意識の昂揚と捉えることができよう。

また『吾妻鏡』と『太平記』の対象年代の間には、十三世紀後半から十四世紀前半まで約六十年の空白期間がある。この空白期間を埋める書物として、『梅松論』や『北条(鎌倉)九代記』といった書物が、さらには十四世紀後半から十五世紀の鎌倉の状況を示す『鎌倉大草子』が、それぞれ流布していたことが分かる。金沢や鎌倉を訪れるような江戸の知識人層はこうした書物を引用し考証しうるほどに読みこなしていたものと推察される。

表1 近世地誌・紀行文鎌倉部の引用文献

東海道名所図会		新編鎌倉志		知識人層旅日記	
引用文献	引用回数	引用文献	引用回数	引用文献	引用回数
吾妻鏡	17	吾妻鏡	138	吾妻鏡	78
太平記	5	元亨積書	28	太平記	16
元亨積書・万葉集・夫木集	4	太平記	25	元亨積書	8
		鎌倉(北条)九代記	13	夫木集	7
鎌倉紀行(海道記)・藤谷集	3	鎌倉大草子	11	新編鎌倉志	5
		鶴岡八幡宮社務職次第	10	東海道名所記・万葉集・北国紀行・發心集・後堀河百首・十六夜日記・梅松論・平家物語	3
長門本平家物語・流布本平家物語・沙石集・新編鎌倉志	2	吾妻鏡脱漏・鎌倉年中行事・花押藪	7	大友興廃記・海道記・鎌倉九代記・鎌倉大日記・長門本平家物語・沙石集	2
		梅松論・鎌倉大日記・平家物語	6		
保元物語・鎌倉大草子・十六夜日記・徒然草・鎌倉記・倭名類聚抄・山家集・新古今集・拾遺愚草・後堀河百首・新後撰集・拾玉集・新拾遺集	1	鶴岡八幡宮記・夫木集(抄)・日工集・沙石集・関東五山記・空華集・神明鏡	5	新勅撰和歌集・曾我物語・壺囊抄・新拾遺和歌集・関東兵乱記・鶴岡日記・無極抄・大納言公任家集・続古今和歌集・關斎遠遊紀行・類聚名所和歌・楚忽百首・詞林采葉・神社考・新古今和歌集・東宝記・北条五代記・上杉禅宗記・鎌倉年中行事・鎌倉大草子・徒然草・千寿謡・源平盛衰記・臥雲日件録	1
		詞林採葉抄・上杉禅秀記・帝王編年記	4		
		十六夜日記・万葉集・北条盛衰記	3		
		天正本・異本を各1点ずつ含む。平家物語には長門本2点、異本1点を含む		そのほか鎌倉記(松村)・鎌倉物語(中川喜雲)・鎌倉順礼記(沢庵)を参考図書とした旨記載あり(各1回)。新編鎌倉志の引用はすべて19世紀のもの。	

注) 新編鎌倉志は2回以下は省略。

二、『新編鎌倉志』の機能

1 『新編鎌倉志』編纂の過程

『新編鎌倉志』は、貞享二年（一六八五）に成立したが、その調査が敢行されたのが、その十一年前、延宝二年（一六七四）のことである。徳川光圀一行は、水戸を発し、房総を経て金沢・鎌倉に入った。その調査期間中は、水戸徳川家ゆかりの英勝寺に滞在した。この鎌倉調査の様子は、『鎌倉日記』と題する紀行文として残されている。その後、現地調査を命ぜられた河井恒久ら十二名、ならびに病気で英勝寺に常駐していた松村清之、河井の死後その業務を引き継いだ力石忠一らの尽力により調査・編集が十一年間続けられたのである¹²。こうした調査方法は、同時期に進物番小野沢助之進を在京させて行われていた京調査と類似している。こうして編纂された地誌『新編鎌倉志』は、単なる地誌ではない。これをもって『大日本史』編纂の礎としようという徳川光圀の意気込みがあった。それは本人が現地調査の先鞭をつけたことにも表れている。なぜなら鎌倉の地誌を編纂することは、すなわち中世前期の歴史を考証し、確定させることにつながるからである。

『新編鎌倉志』の特徴は、何よりも地元の伝承を基盤としてい

ることである。つまり、「土人が伝なり」「土人曰く」「里俗に」などと形容されるものである。「土人」とはいえ、鎌倉中の村人のみならず、神主、住持なども含まれている。こうして調査において採集された民俗伝承に、彰考館において、文献による考証が加えられる。そして最終的に『新編鎌倉志』へ掲載されるのである。

第二の特徴として、引用文献の一覧が添付されていることである。『鎌倉日記』には三二冊、『新編鎌倉志』一一九冊の引用文献が明示されており、考証学の立場を明確に打ち出したものである。その引用文献のなかには、閲覧の機会を得がたい社寺史料、例えば「鶴岡八幡宮社務職次第」「鶴岡八幡宮記」などの史料が含まれていた（論文末史料参照）。こうした社寺史料の調査を反映させた地誌は、後の知識人層にとつて中世前期の知識受容媒体として、鎌倉期の基本的文献として機能したことが推察される。このように、『新編鎌倉志』は、二つの相反するような性格をもっていたのである。

それでは、ここで指摘した点を、具体的事例をもって以下論証していく。金沢八景の成立には、次のような説が近世後期には定着していた。たとえば、文政十二年（一八二九）の地誌『鎌倉攬勝考』には、「当所八景の勝は、延宝のころ、中華の沙門東阜心越といへる禪衲が、本邦へ帰化せしを、水府公の召に応じ、関東へ下向の砌、此地の風景を遊観し、彼土の西湖八景に似たる勝地な

りとて、詞を咏ぜしより、八景の名おこれりともいふ」¹³ という説が掲載されている。

一方で、彰考館は、『鎌倉日記』において「里俗相伝テ有八景ト云」¹⁴とし、『新編鎌倉志』では「里民相伝へて」¹⁵とし、八景が地元の伝承として起こったものとしている。これは前期水戸学の日本中心主義の反映であろうと考えられる。つまり、金沢八景は、中国の西湖・瀟湘の仮託ではなく、日本で独自に自然に起こったという意図を、「里俗」「里民」という言葉に込めているのではないだろうか。いずれにせよ、中世前期から中国趣味の金沢(六浦)紀行が行われているため、早くから中国の八景の比定が諸説なされており、それが民俗伝承として地元に残存していたことは疑いのないところである。

表2は、近世の金沢にかかわる代表的な名所案内記、地誌において、金沢八景の場所がそれぞれどこに比定されていたのか示したものである。この表2によれば、『鎌倉日記』では複数の説が掲載されていることが分かる。これは、鎌倉調査の段階で聞いた八景の説をすべて掲載しているものと考えられる。ところが、『新編鎌倉志』の編纂時には取捨選択された形となっている。

小括すれば、水戸家の鎌倉調査によって、先行文献の『鎌倉物語』¹⁶のみならず、民俗伝承も取りあげられ、八景に関する説は一通り網羅されたのが『鎌倉日記』である。そして、その諸説の

なかから、継続された調査、文献による考証により、ほぼ場所については確定されたのが、『新編鎌倉志』であると言える。けれども、その思想的立場からか、「里俗」であることを強調している側面もあった。

2 『新編鎌倉志』の名所空間構造への影響

『新編鎌倉志』が名所空間構造へいかなる影響力を發揮したか見ていくこととする。名所空間構造といっても、それを構築するのは地元だけではない。そこを訪れる側も、名所の創造の一端を担っている。このケースについては、結論から言えば、『新編鎌倉志』が、その出版後、情報の発信者(地元)・受容者双方へ一定の規定性を与えているのである。換言すれば、彰考館の名をもって鎌倉内の各名所を権威化したということである。表3は、京六角通りで書肆を営んでいた柳枝軒茨木屋多左衛門が扱った彰考館の出版物の目録(正徳三年)である¹⁷。この目録のなかには、当然ながら『新編鎌倉志』もある。さて、この目録において注目されるのは、「参考」と冠された四点の書物である。『参考太平記』『参考保元物語』『参考平治物語』『参考源平盛衰記』といったものは、それぞれ専門的知識人からみればやや俗書といえる軍記物に注釈を加えたものである。これらの版本は、現在各所に残されており、ある程度普及した痕跡が窺える。水戸家は、国史の考証という点

表2 近世金沢八景の比定史

	書物名	夜雨	秋月	夕照	暮雪	帰帆	晴嵐	落雁	晚鐘	心越故事
慶長19年 (1614)	名所和歌物語	小泉	向ひの原	瀬戸	野嶋	室の木	峠	平方	称名寺	
寛永10年 (1633)	鎌倉順禮記	笠嶋	野嶋	夏嶋	富士の景色					
万治2年 (1659)	鎌倉物語	小泉	原	瀬戸の浦辺	野嶋	室の木	峠	平方	瀬戸橋	
延宝2年 (1674)	鎌倉日記	照天宮・小泉・塩屋浜・笠嶋	柴村権現・原	野嶋・瀬戸の浦辺	瀬ヶ崎・野嶋・富士の景色	室の木	町屋・峠・瀬戸弁才天	平方	六浦の南の茂林・瀬戸橋	
延宝8年 (1680)	鎌倉紀	谷村	樺木	野嶋	六浦	夏嶋	瀬戸	洲崎	称名寺	
貞享2年 (1685)	新編鎌倉志	釜利谷村の塩屋の浜(小泉)	柴崎村の南辺	野嶋・瀬戸の浦辺	瀬ヶ崎	刀切村	洲崎	平方(塩焼浜)	称名寺	
天明4年 (1784)	金澤八景案内子	小泉	瀬戸	野嶋	内川	乙鱸	洲崎	平方	称名寺	○
天明期	金澤能見堂八景縁起	小泉	瀬戸	野嶋	内川	乙鱸	洲崎	平方	称名寺	○
寛政1年 (1789)	相州大山順路之記	釜利谷	柴崎	野嶋	瀬ヶ崎	刀切	洲崎	平方	称名寺	
寛政9年 (1797)	東海道名所図会	なし								○
享和1年 (1801)	三浦紀行	釜利谷塩屋	柴崎村の南	野嶋	瀬ヶ崎	刀切村	洲崎	平方	称名寺	(里民相伝えて)
文政12年 (1829)	鎌倉攬勝考	小泉(釜利谷村の北の塩浜)	瀬戸	野嶋(瀬戸の浦ともいふ)	内川(瀬ヶ崎)	乙鱸(刀切村)	洲崎	平方(塩焼浜)	称名寺	○
天保7年 (1836)	江戸名所図会	小泉	瀬戸	野嶋	内川	乙鱸	洲崎	平方	称名寺	○

表3 柳枝軒による彰考館訂本刊行目録
(正徳3年)

書名	冊数
新編鎌倉志	9
参考太平記	41
参考保元平治	15
参考源平盛衰記	50
難太平記	2
医宗必読	10
草露貫珠	22
古篆彙選	5
洪武三重韻	9
花押藪	7
続花押藪	7
救民妙薬集	1
拾遺往生伝	2
舜水談綺	4
扶桑鐘銘集	6
舜水先生文集	30

注) 洪武正韻後印本 (名古屋市蓬左文庫蔵) による

において、フィールドワークとしっかりとされた文献考証の両輪をもって、権威的な立場にあり、いわば考証学の最先端であったことが分かる。

『新編鎌倉志』が後世に与えた影響について述べると、第一に、鎌倉内の名所がほぼ固定化されていたことである。たとえば、近世を通じて在地版元より出版された『鎌倉名所記』に掲載される名所数は、正徳期から明治期まで、多少の増減を含みながらもほぼ一定している¹⁰。一般的に、旅・寺社参詣の大衆化、近世的名所化ともに、名所装置への投資増大のみならず、名所数も右肩上がりに増えていくものと推測される。しかし、鎌倉に限っては決してそうではない。やはりこれは、『新編鎌倉志』が、ある程度新名所形成を阻害する側面をもっていたのではないかと考えられる。

それは、表1の「知識人層旅日記」の欄にある通り、十九世紀の紀行文において、『新編鎌倉志』の引用が目立つこと、さらには十八世紀後半から十九世紀前半にかけての地誌・紀行文において、『新編鎌倉志』の記述をそのまま借用しているものが多くあることなどから立証が可能である。後者について、具体的書名をあげれば、地誌では『相州大山順路之記』(寛政元年(一七八九))・『鎌倉攬勝考』(文政十二年(一八二九))、紀行文では『山東遊覧志』(安永八年(一七七九))・『相中紀行』(寛政九年(一七九七))・『三浦紀行』(享和元年(一八〇一))・『四親草』(天保六年(一八三五))などである。

さらには、表1において、『新編鎌倉志』と「知識人層旅日記」「東海道名所図会」の引用文献を比較すると、「東海道名所図会」「旅日記」の引用文献にあって、『新編鎌倉志』にないものは歌集・謡曲だけである。より詳細に見てみよう。「東海道名所図会」の引用文献総数二十四点(『新編鎌倉志』を除く)のうち『新編鎌倉志』の引用文献にないものは、『山家集』『新古今和歌集』『拾遺愚草』『藤谷集』『拾玉集』のわずか五点である。さらに、「旅日記」の引用文献総数三十二点(徳川光圀『鎌倉日記』の引用文献ならびに『新編鎌倉志』を除く)のうち『新編鎌倉志』の引用文献にないものは、『新勅撰和歌集』、『新古今和歌集』、謡曲「千手」の三点のみである。両者ともすべて歌集・謡曲である。したがって、

あくまでも分析対象とした紀行文・名所図会の限りだが、歴史書・軍記物など歴史にかかわる文献史料において、『新編鎌倉志』を超える史料を引用しているものはないのである。この点については傍証に過ぎないが、後世の知識人が、鎌倉の知識を大部分『新編鎌倉志』に依拠していたことの証にはならないだろうか。

『新編鎌倉志』の後世への影響について、具体的事例をもとに述べてみよう。第一の事例は、すでに筆者は述べたことがあるが、若宮大路の由比ヶ浜に向かつて右手にある「畠山石塔」という大きな石塔である。これは、『新編鎌倉志』によって確定された名所である。ここは『鎌倉日記』の調査の段階では、畠山の誰の墓であるのか判然としなかった¹⁹。また『新編鎌倉志』の記述による限り、その後継続された調査においてか、「畠山重忠」の墓であるとする地元の伝承があることが分かった²⁰。しかし、結局『新編鎌倉志』を編纂した段階では、『吾妻鏡』の記述から、これを「畠山重保」の墓として認定した²¹。『新編鎌倉志』が歴史と民俗の狭間でもつていかに調査・編纂されたかを知るには好い素材である。その後、この畠山重保の墓を記載する書物は、管見のかぎり、すべて『新編鎌倉志』の説を踏襲している。

第二の事例は、金沢八景である。先述の通り、東臯心越禪師が漢詩を詠んだことに起源を求める「心越説」が、十八世紀半ばより金龍院・能見堂の出版物に取りあげられるようになる²²。だが、

表2によれば、八景が確定されたとされる十八世紀半ば以降も、別の説系統が存続することが明らかである。それは、『新編鎌倉志』の説を受け継ぐものである。たとえば、『三浦紀行』が執筆されたのは、すでに心越の説が地元寺社・版元により敷放されていた時期だが、その記主は忠実に『新編鎌倉志』の説を継承している。

この両説を（A）心越説（能見堂・金龍院）と（B）新編鎌倉志説と呼び論を進めていこう。心越説の歴史的根拠の有無はともかくとして、八景それぞれの呼称が確定されたのは、（A）が登場して以降のことである。だが、（A）すなわち現在の金沢八景の原型は、『新編鎌倉志』によってほぼ確定されたことが分かる。それまで諸説あったものを、いったん鎌倉調査・『鎌倉日記』によって拾い上げ、『新編鎌倉志』の編纂時に選択することによりおおよその筋道を付けたのである。つまり、（B）は場所の比定を行い、これを参考にした（A）は呼称の固定をもたらしたのである。結果的には、この（A）が現在まで力を持ったが、少なくとも近世には、知識人の間で（B）をとる人々がいたことも紛れもない事実である。『新編鎌倉志』の強い影響力を示す格好の事例である。

また（A）と（B）の両方の説を継承して誤りを犯してしまったのが、『鎌倉攬勝考』である。『鎌倉攬勝考』は、編者植田孟緒が『新編鎌倉志』の増補版を目指したものであるため、（B）の説を継承するのは当然である。一方で、当時すでに広く浸透してい

たと考えられる(A)も見過ごせなかったのか、最終的に(A)の呼称を最初に掲げ、より詳しい説明文として(B)の説を付すという形態をとっている。そのため、「乙艦帰帆」(A)の説明に「刀切村の東に船見ゆるをいふ」²³(B)という文言を記すという、地理上まったく別の二つの場所を同一の場所とする苦しい構成となったのである。

前期水戸学派は当時の学問の粹を集めた場所である。また幕府は鎌倉幕府の継承者を謳っている側面がある²⁴。この二重の意味において、江戸定府の水戸家による鎌倉の歴史考証、および歴史の再構成化の営みは、知識人層の知識形成、とりわけ中世前期・鎌倉期の知識形成に一定の規定性を与えたものと評価できる。

三、『新編鎌倉志』の浸透

ここまで『新編鎌倉志』の後学への影響について述べてきた。

次にこの『新編鎌倉志』の受容の程度について、より実態的に明らかにしていくこととする。紀伊藩家老三浦家の儒医であった石橋生庵は、『家乗』という興味深い記録を残している。なぜ興味深いのかと言えば、生庵が何歳でどのような書物を読んだのか判然とするからである。ちなみに、形態は日記形式だが、日記としては全体的に整然としており、後人が整理・筆写した記録と考えら

れるが、知識人の書物受容過程を明らかにするには申し分ない史料である。生庵は、その生涯において、当主の江戸参勤に従い何度も江戸と和歌山を往来している。また途中より、侍読の記事も多くなり、侍読のために借覧している側面も強い。この史料については、長友千代治氏により、江戸・和歌山における書肆との交流の実態については明らかにされているが²⁵、ここでは鎌倉に関連する書物の借覧・購入について考察をしていくこととする。

表4は、彼が本を読みはじめてから、元禄六年(一六九三)にようやく念願の鎌倉参詣を果たすまでの、鎌倉に関連する書物の借本・購入本の記録を抽出したものである。彼もまた、十二歳で『太平記』、二十三歳で『吾妻鏡』を初読して以来、『鎌倉九代記』、『神皇正統記』などさまざまな書物を借覧している。そのなかで、まず注目されるのが鎌倉の紀行文を二つ購入していることである。したがって、三十四歳頃には、鎌倉へ行きたいという明確な意志があったものと推察される。

生庵が、はじめて『新編鎌倉志』に触れたのは、貞享二年(一六八五)である。つまり出版された年である。この際、江戸と和歌山で一度ずつ借りている。日記には、水戸家の学者との交流の記事が若干あるため、出版の情報、その内容をいち早く得たものと考えられる。そのため、江戸だけでなく、和歌山へ帰っても、積極的に『新編鎌倉志』を借覧したのであろう。

表4 石橋生庵（紀州藩家老三浦家儒医）の年代別鎌倉関連本閲覧記録

年齢・年代	住居地	借本	購入	備考
12歳、承応2年(1653)	和歌山	太平記初閲		
20歳、万治4年(1661)	同	歌浄瑠璃義経記、曾我記		
23歳、寛文4年(1664)	同	東鑑初読		
24歳、寛文5年(1665)	同	東鑑		
26歳、寛文7年(1667)	同	神皇正統記、平家評判、小田原記	神皇正統記	神皇正統記は購入後読破
27歳、寛文8年(1668)	同	東鑑		
31歳、寛文12年(1672)	同	鎌倉九代記		
33歳、延宝2年(1674)	同	北条盛衰記		
34歳、延宝3年(1675)	同	鎌倉九代記	沢庵鎌倉順礼記	
36歳、延宝5年(1677)	同	北条（鎌倉）九代記、北条盛衰記		
39歳、延宝8年(1680)	江戸	十六夜日記		
40歳、延宝9年(1681)	同	鎌倉記、後太平記		
43歳、貞享1年(1684)	同	続太平記	鎌倉記	
44歳、貞享2年(1685)	同	新編鎌倉志		
45歳、貞享3年(1686)	和歌山	新編鎌倉志、難太平記		
47歳、貞享5年(1688)	江戸	続太平記		
48歳、元禄2年(1689)	同	貧人太平記		
50歳、元禄4年(1691)	和歌山	残太平記、時頼記		
51歳、元禄5年(1692)	江戸	続太平記、新編鎌倉志(12/20)		
52歳、元禄6年(1693)	同	新編鎌倉志返却(2/2)		1月21日～26日 鎌倉参詣

注) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所『紀州藩石橋家家乗』（清文堂出版、1984年）および「家乗」（長友千代治『近世の読書』、青裳堂書店、1987年に所収）より作成。

そして五十二歳にしてとうとう鎌倉参詣を達成することになる。その前年（元禄五年）の十二月二十日には『新編鎌倉志』を五年ぶりに借りている。それから出発まで一ヶ月間じっくり精査したものと考えられる。鎌倉紀行は一月二十一日に始まっている²⁶。やはり生庵も、金沢・鎌倉・江ノ島の三所巡りをしている。鎌倉内の参詣行動も、一章で論証したように、彼もまた雪の下に宿泊し、およそ四日間鎌倉内のすべての方面へ足を伸ばし、隈無く巡見している。その後同月二十六日に帰宅したのち、六日後の二月二日に『新編鎌倉志』を返却している。この六日間は復習していたのであろう。

こうして一知識人を例に取り、鎌倉に焦点をあてて考察すると、鎌倉参詣・『新編鎌倉志』の借覧・紀行文（『鎌倉順礼記』『鎌倉記』）の購入という行為は、すでに得ていた中世の知識をもう一度再確認し、再構成する機会・手段としての機能を果たしていたと言ふことができよう。『新編鎌倉志』の場合、大部であるため携帯には極めて不向きである。したがって、この地誌は、鎌倉参詣にあたって、事前に復習するためのものとして、実用的な目的のために読まれた書物なのである。また『新編鎌倉志』は、鎌倉参詣とは無縁の時期（貞享二年）にも借覧されている。このことから、『吾妻鏡』『太平記』のような編年体の書物に対して、ひとつひとつの場所ごとに整理された『新編鎌倉志』は、鎌倉の紀行文とあ

わせて、中世の基本的文献の一つとして受容されていたとは言えないだろうか。項目別に編まれた正統な「歴史書」として、あるいはある特定の人物、事件の記事にたどり着きやすい、便利な「事典」として、後の名所案内記・紀行文の編者などに利用されたのであろう。

ところで、『新編鎌倉志』の売買金額はいかほどのものだったのだろうか。表5の左側は、名古屋で貸本屋を営んだ大野屋が、明治三十二年（一八九九）に京都大学へ蔵本を売却した時の値段である。表5の右側は、名古屋の国学者で、徳川宗春に使えた河村秀根と、その息子益根の時代に、河村家が購入した書物の金額である。この二つの事例を比較すると、同じ名古屋であることにも起因するのかわ、書物間の値段の比率がほぼ同じであることが分かる。よって河村家が書物を購入していた記録のある十八世紀後半から十九世紀初頭までの時期の『新編鎌倉志』の売値を類推することが可能となる。そこで計算すると、十匁という数字が導かれる。十匁が高いか否かの判断は難しいが、決して安い物ではない。専門的知識人でもない、そうそう買う物ではなかったのではないだろうか。とするならば、『新編鎌倉志』は、知識人層の間で受容され、影響力を保持した地誌・名所案内記であると言える。そしてその影響力は、彰考館の権威が増すにつれてますます強まったのであろう。

表5 大惣本・河村秀根蔵書の鎌倉関連図書の売買値段

大惣本 (明治32年)		河村家蔵書 (1800年前後)	
書名	購入金額	書名	購入金額
新編鎌倉志 (9冊)	2円		
鎌倉物語 (5冊)	3円		
鎌倉年代図会 (5冊)	50銭		
絵本鎌倉新話 (6冊)	30銭		
鎌倉大草紙 (2冊)	30銭		
鎌倉太平記 (12冊)	30銭		
鎌倉志略 (1冊)	1円		
		元亨積書	9匁15本
和注入源平盛衰記 (24冊)	2円		
平家物語 (長門本) (20冊)	7円50銭		
同 (12冊)	1円20銭	平家物語 (12巻6本)	6匁
		東鑑 (脱漏)	23匁26本
太平記 (41巻21冊)	2円	太平記 (21本)	10匁
同 (41巻41冊)	5円		
同 (41巻11冊)	1円		
北条五代記 (10冊)	1円50銭		
難太平記 (2冊)	20銭	難太平記 (2本)	1匁5分
太平記評判 (45冊)	4円		

注) 『京都大学蔵大惣本目録』 (京都大学附属図書館、1988)、「河村秀根蔵書目録」 (前掲『近世の読書』所収)より作成。前者の金額は明治32年京都帝大へ売却時の値段。

三章を小括するならば、『新編鎌倉志』は、主に知識人層が鎌倉訪問を志した時点で、彼らが以前に雑史・軍記物などを読破して得た中世の知識をもう一度確認し補完する機能を果たしていた。その意味において、『新編鎌倉志』は旅を啓発するものではなかった。また寺社参詣において実用的でありながら、一方で〈知〉形成の機能も担っていたのである。

おわりに

ここまで近世の寺社参詣史において、一つの書物がどのような影響力を及ぼしたか考察してきた。また必然的に近世の人々の知識受容の実態解明を問わざるを得なかった。近世前期より鎌倉参詣の主力となっていた江戸在住の知識人層は、名所図会・名所案内記類などに必ずしも惑わされず、目的意識のはっきりとした行動を見せていた。その背景には、雑史・軍記物の精読あるいはその他の手段による複合的知識形成があった。とりわけ鎌倉・金沢のように、参詣者に高い教養を強いる名所の場合、それ以前に形作られた教養によって自発的に参詣行動が惹起されているのである。したがって彼らの場合、大衆的情報文化はあくまでも実用的な目的にのみ利用されるもので、副次的・補足的なものであったと言える。

ただし、本稿では書物の別の側面も明らかにした。本稿で素材とした『新編鎌倉志』は彰考館で作成された地誌である。水戸徳川家で編纂された書物であるという権威をもつて、『新編鎌倉志』は、後の地誌の記述の定番化、名所の固定化をもたらした。伝承調査、文献考証、引用文献の明記という『新編鎌倉志』の特徴は、地元民、在地出版、参詣者へそれぞれ一定の方向性を与えたのである。とりわけ江戸の知識人に対しては、中世の基本的文献の一つとして有効性を持ち、それが彼らの紀行文の記述内容までも左右することとなった。

近世文化史において、情報文化の発達は特徴的な歴史的現象の一つである。しかしながら、本稿での論証において、旅文化において生成された情報文化の矛盾が浮かび上がったのではないだろうか。つまり、一つの書物が世に出ることにより、逆に旅行動の規制、名所創造の規制をもたらすことである。『新編鎌倉志』は、知識人層への権威を保持したという点で特異なものと言うべきかもしれない。しかし、一つの名所案内記が流布することにより、寺社参詣に、「文化の形成」とは逆の何らかの影響を与えることは決して稀なことではないだろう。さらには、現在鎌倉の著名な観光地は「簡略型」と重なっている。これは、近世の大衆的「簡略型」が現在名所のあり方を規定しているのであり、寺社参詣の発達には、こうした二つの相反する変遷過程を孕んでいるのであ

る。

注

- 1 竹田聰洲『祖先崇拜 民俗と歴史』、平楽寺書店、一九五七年。同「近世社会と仏教」(『岩波講座日本歴史』九、一九七五年)。同「日本人の「家」と宗教」、評論社、一九七六年。
- 2 大桑斉『寺檀の思想』、教育社、一九七九年。同「日本近世の思想と仏教」、法蔵館、一九八九年。
- 3 朴澤直秀『幕藩権力と寺檀制度』、吉川弘文館、二〇〇四年。
- 4 高埜利彦「幕藩制国家と本末体制」(『歴史学研究』別冊、一九七九年)(後に同「近世日本の国家権力と宗教」、東京大学出版会、一九八九年)。
- 5 塙書房、一九六四年。
- 6 水江蓮子「初期江戸の案内記」(西山松之助編『江戸町人の研究』三、吉川弘文館、一九七四年)。田中智彦「近世末、大坂近在の参詣遊山地」(『山田安彦教授退官記念論文集転換期に立つ地域の科学』、古今書院、一九九三年)(後に同「聖地を巡る人と道」、岩田書院、二〇〇四年)。
- 7 鈴木章生「江戸の名所と都市文化」、吉川弘文館、二〇〇一年。上杉和央「十七世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」(『地理学評論』七七―九、二〇〇四年)など。
- 7 山近博義「近世奈良の都市図と案内記類―その概要および観光との関わり」(『奈良女子大学地理学研究報告』五、一九九五)。上杉和央「近

世における浪花古図の作製と受容」(『史林』八五—二、二〇〇二年)。

青柳周一「近世後期の絵図・地誌作成と「旅行文化」——近江の旅行史関係史料から——」(『民衆史研究』六七、二〇〇四年)。

8 川名登「利根川図志」の販売と購読者層」(『千葉経済短期大学商経論集』一八、一九八五年)(後に同『河川水運の文化史—江戸文化と利根川文化圏』雄山閣、一九九三年)。

9 歴史学では、小林准士「近世における知の配分構造—元禄・享保期における書誌と儒者—」(『日本史研究』四三九、一九九九年)。若尾政希「『太平記読み』の時代—近世政治思想史の構想」、平凡社、一九九九年。

同「近世人の思想形成と書物—近世の政治常識と諸主体の形成」(『一橋大学研究年報 社会学研究』四二、二〇〇四年)。国文学では、長友千代治①『近世貸本屋の研究』、東京堂出版、一九八二年。同②『近世の読書』、青裳堂書店、一九八七年。同③『江戸時代の書物と読書』、東京堂出版、二〇〇一年。地理学では、上杉和央「青年期本居宣長における地理的知識の形成過程」(『人文地理』五五—六、二〇〇三年)。

10 「新編鎌倉志」、東京大学史料編纂所所蔵。

11 拙稿「大山参詣に見る近世の旅—旅日記の分析を通じて—」(『郷土神奈川』四二、二〇〇二年)、六—七頁。伊勢参宮において、日常参詣が可能な場合、省略される傾向にある。この拙稿の分析では、鎌倉の場合、関東からは二〇%であるのに対し、東北からは実に八五%の割合で訪れている。

12 注10に同じ。

13 「鎌倉攬勝考—『新編相模国風土記稿』第六卷(大日本地誌大系 第二十四卷)、雄山閣、一九八〇年、三五九頁。

14 「鎌倉日記」鎌倉市史編さん委員会編『鎌倉市史』近世近代紀行地誌編、吉川弘文館、一九八五年、三四頁。

15 注10に同じ。

16 「鎌倉物語」横山重監修『近世文学資料類從 古板地誌編十二 鎌倉物語・澤庵順禮鎌倉記』、勉誠社、一九七五年。

17 柳枝軒については、倉員正江「水戸藩儒酒泉竹軒と韻書『洪武聚分韻』の編纂—書肆茨木多左衛門との関係に及ぶ—」(『近世文藝』六六、一九九七年)、小林准士(注(9)論文)、本間純一「書肆と説話—柳枝軒・茨木多左衛門の出版活動から—」(『説話・伝承学』八、二〇〇〇年)など、近年研究が相次いで発表されている。しかしながら、何故水戸家の出版物を茨木屋が一手に扱えたのか、については全くもって不明である。

18 加藤紫識しのぶ「鎌倉名所記」—版行とその周辺—(『東洋大学大学院紀要』三八、二〇〇二年)、二九九—三二四頁。

19 注4、七二頁。

20 注10に同じ。

21 右に同じ。

22 関靖「かねさわ物語」、横浜土地新報社、一九三八年。山中裕「能見堂の歴史—金沢能見堂八景縁起考—」(『三浦古文化』四、一九六八年)。

- 前田元重「武州金沢能見堂とその出版物について」上下(『金沢文庫研究』二二七・二二八、一九七五年)。同「金沢八景絵図考―横長版三種について―」(『三浦古文化』三三、一九八三年)。同「武州金沢金龍禅寺の刊行物」(『三浦古文化』三七、一九八五年)。
- 23 注13、三六四頁。
- 24 深谷克己『網ひきする歴史学―近世史研究の身構え―』、校倉書房、一九九八年、一九八頁。岸本覚「長州藩祖廟の形成」(『日本史研究』四三八、一九九九年)。
- 25 注9長友千代治②著書。
- 26 和歌山大学紀州経済史文化史研究所『紀州藩石橋家家乗』、清文堂出版、一九八四年、二二五―二二五頁。鎌倉参詣の部分は「鎌倉紀行」と題されている。

一凡今所編纂北本御東金澤西御湖
南社之類此作念地圖亦也
一金澤者武州六浦莊而非相州鎌倉
耶茲實時平實御湖等居此以臨
一實如二跡且地理相接實屬秀英開
入番客通鑄金以逐金價為社類故
今併記共曰鑄金志

新編鑄金志引用書目
鑄金集
續古今集
新撰撰集
新拾遺集
大船官公任家集
更級記 實原孝榮 女
西行物語

北園紀行 鹿島山行
東園紀行 鹿島山行
類字名所和歌集 室村昌琳
慈恩百首 宗光
懷中鈔
藤原野行 北條民康
飛枕名寄

感管抄 宗光
保元物語 鎌倉本
保元保元物語 鎌倉本
源平盛衰記
平家物語 鎌倉本
保元平家物語 八卷本 鎌倉本
實錄物語
東鑑

東鑑脫漏
古本東鑑 卷序宗光
帝王編年記
真洞軍中
太平記 全書宗本 全書宗本 全書宗本
異本太平記 全書宗本 全書宗本
保曆間記
岩谷國守撰藏六事

關東兵亂記
北條三代記 宗光
北條與宗記
英美與宗記
保元盛衰記
保元八幡宮記
保元八幡宮御影緣起
鶴岡日記

關本唐
神明鏡
鎌倉大車子
鎌倉元代記
上杉探書記
鎌倉年中行事 實原宗光
鎌倉大日記

鶴岡日記
鶴岡八幡宮寺社卷藏六事
鶴岡供傳帳
鶴岡地主家傳文書
鶴岡公陸官寬文年中修復記
鶴岡御影正行狀
兼川國師新宮講式
押手聖天紙起

關東五時記
關東五山住持籍
建長寺過去帳
東福寺求寺帳
寶受院控制帳宗文 實原國師
東寶記 宗實
賴院阿彌陀緣起 光原宗本
記立上人傳 宗光

常樂寺傳記
江島緣起 宗光
東海通名所記 實原宗光
鎌倉名所記 宗光
鎌倉日記
鎌倉并金澤三寺間對地理之圖
鎌倉物語 實原宗光
鎌倉巡禮記 實原宗光
和名類聚抄
古事談
花盛集
野槌抄
撰要抄

常樂寺傳記
江島緣起 宗光
東海通名所記 實原宗光
鎌倉名所記 宗光
鎌倉日記
鎌倉并金澤三寺間對地理之圖
鎌倉物語 實原宗光
鎌倉巡禮記 實原宗光
和名類聚抄
古事談
花盛集
野槌抄
撰要抄

<p>神社考 佐竹系圖 常用太古山指香寺系本 足利系圖 北條系圖 古本北條系圖 常用増身正宗寺系本 上杉系圖 首藤系圖 田代系圖 小栗系圖 花押敷 千手経續象記 星井 通鑑綱目 皇明護法錄 古今醫統 本州綱目 二程全書</p>	
---	--

<p>下學集 元季釋書 住畫贊 扶桑釋林諸祖傳 東漢諸祖傳 太休正念錄 竺仙錄 空導集 落葉集 日工集 日伴錄 西月風 香廊圖寶記 東遊路行記 万里居士 梅花無盡藏 才里居士 隨筆詩文 書園鏡鑑集</p>	
--	--

<p>新編鎌倉志題目 第一卷 鎌倉地理之圖 鎌倉大志 鎌倉八幡宮 鎌倉下 鎌倉 鎌倉前司 鎌倉 鎌倉 鎌倉 鎌倉 鎌倉</p>	<p>通鑑卷百十九部</p>
---	----------------